

久保田徹さん

(ドキュメンタリー映像作家)

スロー・ジャーナリズムで真実を伝える

久保田徹さんは、昨年七月、軍部が権力を握ったミャンマーでのデモを撮影中、逮捕され、懲役十年の実刑判決を受けた。「恩赦」により十一月に帰国を果したが、自由を奪われた状況と絶望的な判決にどう対応したのか。ミャンマーの人たちのこれからは？ フリージャーナリストの榎田秀樹さんが久保田さんに聞いた。

在日ロヒンギャからの批判

——ミャンマーに関わるきっかけはなんだったのでしょうか？

きっかけは、高校生のときのアメリカへの一年間の留学です。そこはクリスチアン系の高校で、無宗教の自分は疎外感を覚えたんです。宗教ってなんだろうって考え始めたところで、宗教に関する授業で国際問題的な宗教紛争を描く映像を見ました。そこで二〇一二年にミャンマーで起きたロヒンギャ民族への虐殺を知

りました。帰国後の二〇一四年、AO入試で慶應大学に合格しますが、そのとき書いた論文がロヒンギャのことでした。ただこのときは、単に情報を知っていただけで、進学するために取ってつけたようにロヒンギャのことを書いたにすぎません。

——その後、実際にロヒンギャの人たちに会うわけですね。

大学では、国際問題の理解を深め啓発することを目的とするサークル「学生団体S. A. L」(以下、SAL)に入りました。そこに、在日ロヒンギャに会いに行っている二年上の先輩がいたんです。じゃあ僕もと、

群馬県館林市のロヒンギャ・コミュニティに同行させてもらいました。

——どんな印象をもたれました？

まだよくわかっていなかったこともありますが、「思ったより普通に暮らしているな」というのが第一

印象です。アメリカで見た映像からは凄まじい暴力を受けている人たちとの印象を受けたので、普通に町に馴染んで暮らしていることに驚きました。でも、実際に当事者たちに会ったことで関心は高まりました。

——SALは啓発活動に取り組んでいますが、在日ロヒンギャのことをどう周知していたのですか？

二〇一四年十一月。女性の先輩がロヒンギャ・コミュニティを撮影し、二十分くらいに編集した映像を渋谷のウイメンズプラザで上映しました。日本に難民が住んでいるとの切り口ですが、会場には五百人くらいが入り、刺激を受けました。大学生でもこんな素晴らしい仕事ができるのかと。自分もロヒンギャのことを伝えたいと思ったのが一番の収穫でした。その後、僕がそのプロジェクトを引き継ぎますが、友人と一緒に「もつとロヒンギャに注目してもらおう」と新たな映像制作に取り組みます。そして館林で上映会を実施したのですが、そのときのアンケートで在日ロヒンギャの方から、「これだと私たちの経験がちっとも伝わらない」とのコメントがあった。そこでミャンマーに行こうと決めました。

——それはいつですか？



くぼた・とおる 1996年神奈川県横浜市生まれ。慶應義塾大学政治学科在学中から創作活動を開始。森友学園問題で自殺に追い込まれた赤木俊夫さんの妻、雅子さんの依頼で制作した『私は真実を知りたい』などの作品がある。